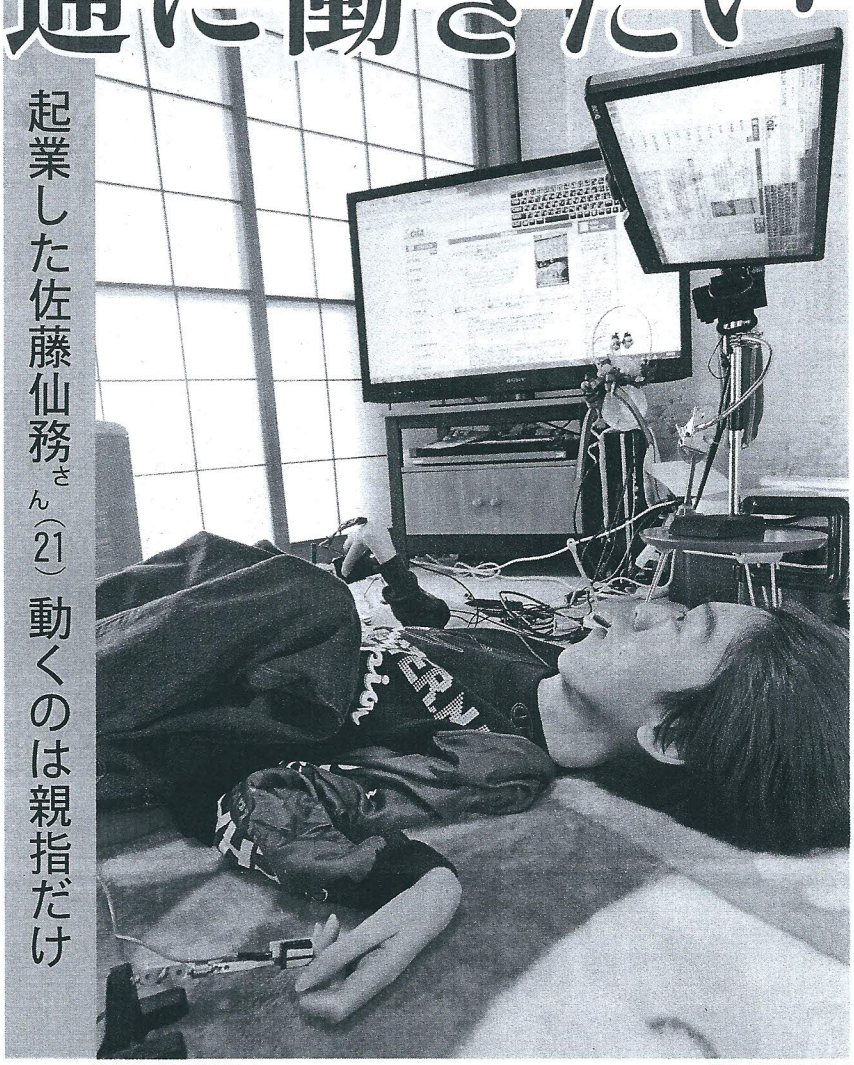
普通に働きたい

起業した佐藤仙務さん（21） 動くのは親指だけ



仕事をする仙務さん　撮影・野間あきら記者

全身の筋力が低下していく脊髄性筋萎縮症。10万人に1人といわれる難病です。生後10カ月で発症、医師に「余命5～10年」といわれながら周囲に支えられ、19歳で友人と会社をつくった青年がいます。　加來恵子記者

この青年は、愛知県東海市に住む佐藤仙務（ひさむ）さん（21）。いま、同じ病気を持つ、三つ年上の松元拓也さんとともに起業し、ウェブや名刺製作などの仕事をしています。

仙務さんを毎日、介助しているのは母の稲枝さん（51）です。

「生まれて10カ月くらいの時に病気がわかり、余命宣告をされた時はショックで言葉がなかった」と振り返ります。

病院や訓練施設をいくつも回り、いまも病院通いを続けています。幸いにも症状は止まっている状態で、治療法の開発に期待しています。稲枝さんは、体位を変えるために2時間おきに毎晩起きます。睡眠時間は平均3～5時間。トイレやお風呂も介助します。

いま、仙務さんが自力でできるのは話をすることと、両手の親指1センチくらいを動かすこと。それでも自宅であおむけになった状態で、パソコンを使って文章を打ち、スカイプやIP電話（インターネットなどを利用した通話サービス）でクライアントと話をしています。

「パソコン画面のキーボードで、右手の指先でカーソルを操作し、左の指先でクリックします。この機械は僕用に父が作ってくれました」

「介助は生活の一部」と話す、お母さんの稲枝さんと仙務さん

佐藤仙務さんと松元拓也さんが作ったウェブ製作会社「合同会社仙拓」
http://sentaku-llc.co.jp/

起業までを『働く、ということ―十九歳で社長になった重度障がい者の物語』（彩図社刊）にまとめました。

人間ドキュメント

人と出会い 人生の幅広げて

暗闇の中

小・中・高校と、養護学校に通った仙務さん。高校卒業のさい、職場体験で授産施設（注）に行きました。しかし、重度の障がい者を受け入れる環境はないことがわかりました。

「僕は、家族にも助けられ、〝障がい者だから〟という特別な意識をもたずに育ちました。高校を出て普通に社会に出て働くことも当たり前と考えていた。でも現実の社会は違いました。障がい者と健常者は違う。社会との考え方のギャップを目の当たりにし、どうしたらいいのかわからなくなりました。暗闇の中にいるような日々でした」

葛藤の中で、周囲が思いもよらなかった道が浮かんできました。

「受け入れてくれる職場がないなら、自分で職場＝会社をつくろう」。そう考えたら霧がはれたようでした。

しかし、重度の障がいを持つ19歳の起業に、まともに取り合う税理士や行政書士はいませんでした。家族にさえ信用してもらえませんでした。

それでも「普通に働く」願いをあきらめませんでした。わかりあえたのは、同じ病気をもつ松元さんでした。会社を立ち上げるための資金を親に頼らずに、自分たちで何とかしようと松元さんと相談。得意の文章力をいかして、新聞社のエッセーに応募し「大賞の100万円」を狙いました。結果は「佳作」の5万円でした。

さらに名刺製作や親戚のお店のウェブ製作などで10万円をため、19歳で、「合同会社仙拓」を設立したのです。社名は2人の名前から1文字ずつをとりました。

「何か起きた時に責任がとれるだろうか」という不安や怖さがありました。そのとき、「怖い部分を大切にしながらやればいい」と言った松元さんの一言に、救われたといいます。

会社といっても、自宅が〝事務所〟。営業と経理は、自宅のパソコンで。スカイプを使って講演したり、パソコン教室も開きます。職業訓練校から「働く」をテーマに講話依頼されたことも。〝利益〟はまだまだですが、「働く」という願いが実現したのです。

（注）授産施設　心身上などの理由により就業困難な人に就労や技能習得を手助けする施設

〝初任給〟

仙務さんにはやりたいことがありました。

「家族や親戚など、これまでお世話になった人に恩返しがしたい」。

2人の兄は、初めての給料を〝家族でご飯を食べに行く〟ことに使いました。仙務さんも、やっと手にした半年分の〝初任給〟、6万円のうち2万円を使って「うなぎ」を食べに家族を招待し、残る4万円で母に腕時計をプレゼントしました。

「僕にとって〝働く〟ということは、利益も大事だけれど、いろんな人と出会うことで、人生の幅を広げていくことじゃないかと思うんです。だから仕事を通して、まわりの人との関係を続けていくことが僕にとっての『働く』ということかもしれません」

「僕は自分で会社をつくったけど、〝障がい者でも会社を起こせる〟と言いたいわけじゃない。障がい者も健常者も関係なく、一緒に働ける場所をつくりたかったんです」

仙務さん